



ワークショップ「生命科学と死生学の共働」 P11

■ 巻頭エッセイ

下田 正弘 柴田 元幸 栗原 剛

■ イベント報告

余英時教授講演会

ワークショップ「生の哲学の彼方

ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』再読」

ワークショップ「現代フランス哲学と生命論」

Michael Heidelberg教授講演研究会

第19回死生学研究会

Sara Heinämaa博士講演会

ワークショップ「生命科学と死生学の共働」

シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性

東西比較の試み」



Michael Heidelberg教授講演研究会 P8

■ 企画案内

アカデミック・ライティング集中講座

研究会のご案内

■ 「死生学の展開と組織化」組織図



シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」 P12



下田 正弘 (人文社会系研究科教授 インド哲学仏教学)

問いの受け渡しという作業は、どこか生命が誕生する過程に似ている。世代間であれ、異性間であれ、生命の誕生は他者の存在と、他者との共同作業を必要とし、しかも出現した生命は、作業にたずさわったものたちの、いずれでもあり、いずれでもないような、あらたななにかとなっている。問いを受け渡す場合も、発信者と受信者があり、問いがうまく共有され、持続的に追及されたとき、両者のあいだには、これまでなかった、あらたななにかが生まれ出している。

問いを提起して共同作業をはじめようとするときに必要なのは、問いの対象の輪郭をあらかじめ明確にして相手に手渡すのではなく、受け手のほうにその輪郭を彫りだす力が芽生えるよう配慮することであろう。問いは単独に存在するのではなく、問う主体とのかかわりにおいてある。問いの対象は、探求の進展とともにすがたを定めることもまれではなく、それでも問いとして成立しつづけるのだとすれば、問いの一貫性は、問いの対象の不変性に依存するのではなく、むしろ問い手が問いつづける姿勢の持続性によっている。問いの対象が、たとえ当初は瞭然としてはいなくとも、あるいは時とともに変容していても、問いを希求する強い力が問い手の内部に存しつづけるなら、未知の対象は、問い手の姿勢におうじて、やがてしかるべき相貌を決定し、画然としたひとつのすがたをもってあらわれてくる。

人文学の分野に出現した死生学は、人文学にとっては未聞の問いであり、いまだに輪郭の未詳な対象であろう。死生学を明かすことは、死生学を生み出すことにほかならず、そのためには、死生学を問いとする力が、人文諸学の内部において、可能ならばそのできるときぎり内奥において芽生え、成長し、はたらかなければならない。ここで必要なのは、死生学がみずからの輪郭をあらかじめ確定して人文学に授けることではなく、人文学から問いの対象とされつづけ、希求しつづけられる存在となるよう、みずからの独自性を、人文諸学との関係において模索することである。こたえがあらかじめ隠しおかれた擬似的な問いではなく、秘められたものが未知なる真正の問いが成り立つのは、あくまで問

い手とのあいだにおいておいてであり、死生学が掛け値のない問いであるとするなら、その輪郭の完成には、問い手である人文諸学の存在が必要となる。

死生学は人文学の内部から要請されて誕生したもので、かならずしもない。それはむしろ医療や看護や福祉にかかわる喫緊の諸問題、さらには科学技術や社会の変容による死生をめぐる環境の急激な変化によって、およそ異なる場で生まれた問いが、外から人文諸学へと与えられた面がおおきい。死生学の重要な役割のひとつは、この問いの与え手と受け手とのあいだを橋渡しするところにある。

伝統的な人文学は外に発生している諸問題に精通してはいない。死生学は外部のものたちにおいて芽生えたこの問いを繊細に受けとったうえで、人文諸学の内部にその問いが芽生えるよう、注意しながらその問いを培養しなければならない。人文学のがわは、いまだ聞いたことのない現場からの依頼にたいして、さし出された小さなイメージの胚をみずからの内部で育て、やがて明瞭なあたらしい概念を生み出してゆかねばならない。死生に関心をしめさない人文学はおよそありえず、人文諸学のそれぞれの内部には、やがて死生学として成長、誕生するものへの問いがすでに胚胎されている。死生学が、この胎へと外部の問いの核をたいせつに移植しうるなら、死生学は人文学からの死生学として暖められ、孵化させられるだろうし、人文学は、みずからの内部からあらたな生命を生み出す力を確信し、より強い存在へと変じてゆくだろう。





死と二十一世紀アメリカ小説

柴田 元幸 (人文社会系研究科教授 英米文学・現代文芸論)

十九世紀のアメリカ人作家マーク・トウェインはユーモアが身上で、数多くの傑作なジョークを残しているが、そのなかでも僕が好きなのは、「トウェインが死んだ」と新聞に誤報が載ったあと彼が発表したコメントである。

The report of my death was an exaggeration. (私が死んだという報道は誇張である。)

生と死という、この上なく重大かつ明確な境界線で隔てられていると思われがちな二つを、あたかも連続しているかのように語っているところにこのジョークの可笑しさがあるわけだが、最近のアメリカ小説を読んでいると、いったい生と死の境界ってどこまで明確なのかしらん、と思うことがたびたびある。

「思い描いてほしい、死んだ男がある都市に着くところを。何日も、死んだ男はよたよたと、死者が生き返ったらきつとこんなふうにも墓からよたよたと出てくるのだろうと思える様子で歩き回る。よく眠れなかったかのように顔色は悪く目は腫れぼったく、三日分の無精髭をさすって、いったいここはどこだろうといぶかしんでいる」(Paul LaFarge, *The Artist of the Missing*, 1999; 訳は引用者。以下すべて同)

「来世において、レイチェルは一人で暮らしていた。板張りのキャビンに住み、庭にはハイイロガンが大勢いて、彼女が餌をやってもやらなくても適当にやりくりしていた。紫色の朝顔が台所の扉のそばに咲いていた。いつもかならず初夏の朝だった。彼女が死んでからずっとそうだった」(Maureen F. McHugh, "Ancestor Money," in *Mothers & Other Monsters*, 2005)

「昔むかし、妻が死んでいる男がいた。男が妻に恋したとき彼女は死んでいたし、一緒に暮らした、やはりみな死んでいる子供が三人生まれた十二年のあいだも死んでいた。これから語ろうとしている、妻が不倫をしているのではと夫が疑いはじめた時期にも、彼女はやはり死んでいた」(ケリー・リンク「大いなる離婚」、『マジック・フォー・ビギナーズ』原書二〇〇五年)

どうしてこんなに現実ばかり描くんだろう、と一九八〇年代ころに首をかしげていたのが嘘のように、二十一世紀のアメリカ作家たちは、日常から異界へとともたやすく移行する。あるいは、異界をあたかも日常であるかのように描いたり、日常と異界がほとんどごっちゃになっていたり。その異界のなかでも、「行き先」としてポピュラーなのが、どうやら死の世界のようなのである。そうやって生の世界と死の世界を合わせ鏡のように描くことで、生の実感を伝えようとする書き手が増えてきた。

で、そこに共通して見られるのは、そうやって描かれている「死」なり「死後の世界」なりが、生々しい恐怖感を喚起するというよりは、どこか滑稽で、おはなしっぽいことである。むしろ作家が何を素材に作品を書くかは知るよしもないが、印象としては、死を身近に感じた強烈な実体験に基づいているというよりは、物語やテレビを通して身についた死のイメージを素材に、自分の想像力を通して思い思いに歪めてみせているといった感がある。

なぜ現代アメリカの作家たちは、そういう書き方をするのか？ 僕の勝手な仮説だが、二十一世紀に入ったあたりから、作家として活躍する人たちが、子供のころからずっとテレビや映画に浸って生きてきた、いわば無意識がポップカルチャーで出来ている世代になってきたことが大きいのではないか。

こう書くと、死に限らず現実との直接の結びつきを失って、すべてイメージを通して経験するしかない現代社会の貧しさを嘆く声聞こえてくるが、むしろ嘆いてもはじまらない。結局、どれほど死を間近に目の当たりにしようと、自分の死ではないのだから、最後のところは想像力の問題だともいえる。そもそも、出来損ないのテレビドラマからでも、人は(そして、子供の感性をあんまり特権化するのもしよくないけれど、特に子供は)死なら死を生々しく実感するのではないか。引用した三作も、おはなしっぽい滑稽な設定からはじめながらも、いずれそれぞれ切実な思いにたどり着くのである。



「死生学」と私

栗原 剛（本COE研究拠点形成特任研究員 倫理学）

「死生学」の「構築」から「展開と組織化」へとつながる一連の研究プロジェクトに、一研究員として参加させていただくようになってから、早くも丸五年の月日が経とうとしている。「死生学」とは、これまでの私にとって何だったのか。またこれからの私にとって、何であり続けるのか。無理にでも、言葉にすべき時期が来ていると感じる。

この五年間に開かれた、数々のシンポジウムやイベントに参加する中で、自分に突きつけられ続けた問いは、思い切ってまとめてしまえば、次のようなものである。

現に今、死に行こうとしている人々。また、現に今、生まれ来ようとしている人々。（さらにはそういう人をごく親しく見守り、共にあるとする人々。）彼らを文字通り目の前にし、手の届く距離で向かい合ったとき、「倫理」を学ぶ者として、より広くは「人文」を学ぶ者として、果して自分には一体、何が言えるか。あるいは一体、何が出来るか。私にとって「死生学」の問いは、煮詰めてしまえば、この一点に絞られてくるように思われる。

昨年夏、長く入院していた祖母の死に立ち会った。数年前の春には、二つ年の離れた妹の、初産に立ち会った。どちらの瞬間にも、私は「倫理」を、「人文」を学ぶ者としてあり、またすでに、「死生学」プロジェクトの研究員だったのである。しかしそうした立場にある者として、私に出来る特別なことなど、何一つありはしなかった。その時私に出来たことは、わずかに、彼らをじっと見つめることであった。あるいはまた、手をそっと握ったり、足を丁寧にさすったり、胸に抱きしめたりすることであった。そうした中で、湧いてくる様々な感興をどうにもできず、ときに涙をもよおすことであった。

これらの厳粛な時間は結局のところ、私が「倫理」や「人文」や、また「死生」を学的対象として専門にしている、というささやかな事実よりも、明らかに、そして遥かに、先行する真実であったと思う。それに比べると、学問が、その方法において真実に触れようとする行き方は、情けないほどに遅く、まどろっこしいものである。たとえば、医術・宗教・芸術、そういったものであればおそらくは、死や生の厳粛な

尊さに追いつき、関わるための、直接的なすべをそなえているだろう。しかし他ならぬ学問について言えば、それは死生の否応ない現場に対して、どうしても立ち遅れざるを得ない。

私自身の事情で言えば、「倫理学」や「日本倫理思想史」という専門名を前に押し出すとき、〈立ち遅れる〉もしくは〈間に合わない〉という、学問の宿命とでもいうべきありようは、実は所与のものとして受け止められている。むしろ、学はそこにこそ立つのだ、という感覚さえある。立ち遅れることに引け目を感じるようでは、学は成るまいと思う。

しかし、「死生学」を、一研究員としてではあれ自らの看板として押し立てるとき、事情は異なってくる。自分にはたった今、何が言えるか。何が出来るか。この問いが、どうしようもなく身に迫るのを感じる。おそらくそこにこそ、「死生学」という新しい学問分野の、果敢な挑戦があるのだ。これは、生来鈍い性質の私が、五年もの間プロジェクトの中であって、ゆっくりと、しかしひしひしと自覚した、大切な感覚である。

21世紀COE「死生学の構築」を打ち上げた昨年の春、拠点リーダーの島菌進先生が、私たち若手研究員に向けてくださったお話の中に、次のような言葉があった。「ご自分の専門と死生学とを、いわば二本立てで、推し進めていただきたい」。〈二本立て〉という穏やかな言葉は、このプロジェクトを立ち上げ、つねにその最前線で世の人々の要求に応えようとしてこられた先生が、いまだその圧力に耐えかねるであろう後続の我々に対し、最大限に配慮してくださったもの、と受け止めている。〈二本立て〉は、いかに〈二本立て〉として成立するのか。〈二本〉として地上に生える木に喩えるなら、その根はいかにして地中でつながり、それぞれの枝先はどこへ伸びゆくのか。グローバルCOEとして新たな段階に入った「死生学」プロジェクトの中であって、研究員としての内なる自覚の中にもまた、その「展開」と「組織化」が求められるのだということを、いま、強く感じている。

余英時教授講演会報告

小島 毅（人文社会系研究科准教授 中国思想文化学）

余英時（Ying-shih Yu）博士は中国思想史研究の分野における世界的権威で、現在はプリンストン大学名誉教授である。氏の研究領域は幅広いが、そのなかには儒教思想における靈魂の問題がある。「死生学の展開と組織化」にも関わりの深いテーマである。おりから、同じく平成19年度に発足した関西大学グローバルCOE「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成——周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出」（拠点リーダー：陶徳民関西大学教授、<http://www.kansai-u.ac.jp/Kouhou/globalcoe/globalcoe1.html>）が、その発足記念国際シンポジウム「文化交渉学の可能性を考える」のために余教授を招聘したのにあわせて、東大での講演会が企画された。その際、氏にはぜひ儒教思想の死生観を内容とするものと依頼し、2007年10月9日にそれが実現した。

演題は、*Chinese Views of Life and Death: With Special Reference to Confucian Tradition*、和訳すれば「中国人の生死観——儒教の伝統を中心に」となる。Views of Life and Deathという語順は、氏自身の提案である。上記和訳もこの語順に合わせている。講演冒頭では、『論語』に載る孔子の（ものとされている）ことば、「未だ生を知らず、いづくぞ死を知らん」が引用され、儒教思想における「生と死」——「死と生」ではなく——の問題が語られた。

ともすると、上記孔子の発言などを根拠に、儒教は死を語らないと思われ、それが一つの根拠になって「儒教は宗教に非ず」とする見



解が強い。しかし、儒教関連の史料には死者の魂に関する言説が多く見られる。余教授はそうした事例を紹介しながら、中国古代における「死生観」を明快に述べてくださった。

この講演会は、東京大学文学部中国思想文化学研究室が主催し、これに、文学部の次世代人文学開発センター、文科省科研費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」と並んで、共催団体として本グローバルCOE「死生学の展開と組織化」が運営にあたった。当初は会場として文学部211番教室を予定していたが、余教授の高名を慕って思いのほかに聴衆が多くなり収容しきれなくなったため、急遽、3番大教室に場所を移動して実施した。

余教授は、上記関西大学での講演や名古屋大学における日本中国学会での大会記念講演では中国語による発表をおこなったが、東大では主催・共催側から申し出て、英語での講演をお願いした。来日にあわせて、事前に3つもの講演原稿をまとめる作業を、余教授は快諾してくださった。東大の講演会場では、英語原稿全文を整理編集したものに余教授の紹介記事を付した冊子が配布された。作成作業にあたったのは、中国思想文化学研究室院生の新田元規氏、「東アジア海域交流」事務局の宗村美里氏、それに「死生学」の鈴木健太氏である。

なお、この講演原稿の全文和訳は、なかに登場する中国思想関係の術語に詳細な語釈を付したかたちで、『死生学研究』に掲載することを企図している。



ワークショップ「生の哲学の彼方」

ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』再読」報告

鈴木 泉 (人文社会系研究科准教授 哲学)

アンリ・ベルクソンの三つ目の主著『創造的進化』が刊行百周年をむかえた2007年、世界各地でこれを記念する学会が開かれたが、日本でも10月16日から20日にかけて、東京と京都で計三回の大がかりな国際シンポジウムが開催された。この企画と連動する形で、本G-COEでは、研究プロジェクトに深く関わりのある四つ目の主著『道徳と宗教の二源泉』を主題とするワークショップを開催した。(10月18日午前10時から午後6時まで、本郷キャンパス法文二号館教員談話室。ベルクソン『創造的進化』刊行百周年記念国際シンポジウム実行委員会との共催、フランス大使館・ベルクソン哲学研究会の後援。)

『二源泉』(1932年)は、晩年のベルクソンが、独自の生命論的視点から道徳と宗教の本質を捉え返し、「閉じた道徳」・「静的宗教」と「開いた道徳」・「動的宗教」という二つの類型をもとに幅広い主題に関して思索を繰り広げた哲学的遺著とでも言うべきものである。前世紀後半における生命科学の爆発的な発展や社会構造の大きな変化、さらには宗教のさらなる世俗化といった事情を考慮しても、この古典が問いかけるところは今なお大きい。そこで、人間の生と死に対する私たちの考えを根底から支えるような道徳と宗教の本質に関するベルクソンの思想の意義を掘り返すことによって、死生学研究に関して原理的場面から幾ばくかの寄与を行う、というのが主たる目的であった。また、日仏間の実質的な議論の場を創出することも目的の一つであった。

そこで、日本側五人の研究者が発表を行い、フランス側の研究者が予め送られていた原稿に対するコメントを述べるという、ワークショップ形式を設定したが、80名ほどの聴衆の熱心な参加も手伝い、目論見通り密度の高い議論が展開された。島蘭進研究拠点リーダーによる開会の挨拶の後、第一セッション(司会は鈴木泉)においては、杉村靖彦氏(京都大学)による「田辺元の『二源泉』読解—京都学派

の哲学におけるベルクソニズム「受容」の一例として」と岩田文昭氏(大阪教育大学)による「宗教史における『二源泉』」の二つの発表がなされ、これに対し現在のフランスにおけるベルクソン研究を率いるフレデリック・ヴォルムス教授(リール第三大学)が熱のこもったコメントを寄せ、若干の議論の後、さらなる議論は全体討議に持ち越された。午後の第二セッション(司会は塚本昌則准教授)においては、瀧一郎氏(大阪教育大学)による「『二源泉』とアナロジーの美学」に対し、若手の俊英アルノー・フランソワ氏(リール第三大学)が骨太なコメントを寄せ、両者で重要な議論が交わされた。続く第三セッション(司会は杉山直樹学習院大学准教授)においては、本研究科の鶴岡賀雄教授による「神秘主義の歴史の中の『二源泉』」と中村弓子氏(お茶の水女子大学)による「哲学者のモラルと『道徳と宗教の二源泉』」の二つの発表がなされ、これに対するフランソワ氏からのコメント、病気で出席の適わなかったジャン＝クリストフ・ゴダール教授(ポワチエ大学)からの文書によるコメントを受けた若干の質疑の後、全体討議(司会は安孫子信法政大学教授)に移り、フロアからの熱心な質問を中心とした討議が行われた。閉会后、場所を工学部に移して懇親会を催し、立花政夫研究科長による挨拶の後、ワークショップの熱気そのままに議論が続けられた。

日本側発表者の発表の密度の濃さ、フランス側コメントーターの真摯な応答、そして通訳者(藤田尚志(日本学術振興会)・谷口薫(四国大学講師)両氏の八面六臂の活躍もあり、親密な空気の中、実質的な議論が繰り広げられ、充実した場を作り出すことができた。死者の共同体といった問題を初めとして、死生学研究にとって重要な問題が無数に議論されたが、その議論の詳細は、近く刊行される日仏二カ国語版のアクトをご覧ください。





ワークショップ「現代フランス哲学と生命論」報告

鈴木 泉 (人文社会系研究科准教授 哲学)

2007年10月19日午後1時半から午後4時まで、山上会館において、ピエール・モンテベロ教授(トゥールーズ第二大学)を招いて、ワークショップ「現代フランス哲学と生命論」を開催した。モンテベロ教授は、1994年にメヌ・ド・ピランに関する大部の博士論文 *La décomposition de la pensée* (Millon) を刊行されたあと、2003年には、ラヴェッソン・タルド・ニーチェ・ベルクソンを主たる対象に「自然の哲学」としての「もう一つの形而上学」をめぐる好著 *L'autre métaphysique. Essai sur Ravaisson, Tarde, Nietzsche et Bergson* (Desclée de Brouwer)、昨年秋にはその続刊にあたる *Nature et la subjectivité* (Millon) を刊行した、現在のフランス哲学において、主にフランス哲学を素材としながら、独自の自然哲学の構想のもと、生命・身体と主観性に関して考察を深めている中堅どころの哲学者であると言うことが出来る。私は、死生学研究の一環として、死というよりは生・生命に関する原理的考察を進めるために、現代フランス哲学を主たる素材にした研究会「現代フランス哲学と生命論」を来年度から開催する予定であるが、その予告編といった意図をもって、この分野に関する最適の哲学者であるモンテベロ教授を招聘し、実質的な議論を行うべくワークショップ形式の研究会を開催することにした。

教授は、現代フランス哲学を代表する哲学者であるドゥルーズに関する著作 *Deleuze, philosophie du paradoxe* (Vrin) を執筆中とのことだったので、その一部を講演して頂いた上で、その内容および教授の仕事全体に対して私がコメントを寄せ、それをもとに議論を行った。

1時間半ほどの講演「いかに自然を思考する



か」は、基本的には、ドゥルーズ&ガタリの主著『千のプラトー』の(基本的概念が極めて風変わりな仕方で提示される)「道徳の地質学」の明晰な読解を行



い、ドゥルーズの自然哲学の意義を解明するものであった。ドゥルーズ(&ガタリ)の思考は、本邦でも一時期ジャーナリスティックな仕方で話題にはなったものの、フランスを含めて未だ本格的な読解すら進められていないが、教授の講演は諸概念の地図を明晰に取り出した上で、その思考の非人間主義的な側面の重要性を的確に浮き彫りにする、極めて興味深いものであった。構造主義や生命科学の進展を背景に、人間が自然や社会の一部でしかないという事実をもとにした思考が精力的に繰り広げられた現代フランス哲学のブームが去った後、様々な形で人間主義の回帰が見られるように思われるが、人間は自然によって形成された存在でしかなく、だからこそ、他の異なる存在へも生成し得るという意味での非人間主義を説くドゥルーズ(&ガタリ)の思考の重要性を浮き彫りにする教授の読解は貴重なものであり、同じく非人間主義的な思考について短いエッセーを書いたことのある私としても大きな刺激を受けると共に共鳴するところが大きかった。そこで、この点を中心に、ドゥルーズ哲学総体の解釈に関する論点も含めて30分ほどのコメントと議論を行った。その後、本研究科の鶴岡賀雄教授や塚本昌則准教授を含む20人程の参加者の皆さんから、ドゥルーズの方法論的側面やその言語論の意義づけ、さらにはミシェル・アンリといった同時代の哲学者の思索との関連等々といった的確かつ重要な質問が続出し、つつい休憩を取ることすら忘れて計3時間もの間充実した時間を過ごすことができた。

死生学研究の中心成果とこのような特異な思考とがどのように切り結ぶのか、ということは今後の課題ということになるだろうが、その作業は上述の研究会で展開することにしたい。



Michael Heidelberger教授講演研究会報告

一ノ瀬 正樹 (人文社会系研究科教授 哲学)



去る2007年10月23日火曜日、東京大学文学部哲学研究室において午後5時より、ドイツのチュービンゲン大学ミハエル・ハイデルベルガー教授の講演研究会が、G-COE「死生学の展開と組織化」主催、哲学会共催、の形で開催された。ハイデルベルガー教授は、科学哲学、因果論、確率論、心理学者フェヒナーの研究で著名な研究者で、実際今回の来日も東京で開かれたフェヒナーについての国際研究会議に出席することが主目的であった。それに際して、教授の長いお知り合いであられる京都大学の内井惣七名誉教授から、できれば東大でハイデルベルガー教授の講演会を開けないか、との照会があり、今回の講演研究会の開催に至ったのである。そもそも筆者自身、確率の哲学に大いに関心を抱いており、『確率革命』という本の編者としてのハイデルベルガー教授を知っていた。そして、筆者はいま大学院で「生物学の哲学」を主題にしてゼミを行っており、ハイデルベルガー教授も因果論や確率論との絡みで生物学の哲学についても一家言をお持ちということで、その辺りの主題を扱った講演をしていただくことに相成った次第である。

講演は「Lifeless objects and living beings: chances for a neo-Aristotelian approach?」という表題のもと英語で行われ、生命概念そのものについて根源的な問いを向けるという内容のものであった。ハイデルベルガー教授はまず、デカルトの「精神」と「物体」の心身二元論に言及し、そこには「生物」という別個なカテゴリーが欠けていて、「生物」は理性を持たない「物体」の中に取り込まれていたという近代的思考の原点をえぐりだす。しかし、そうした生物理解が私たちの前科学的な生命概念の理解と折り合わない指摘

し、アリストテレスの生命把握に問題解決の素材を求めてゆく。教授は、アリストテレスの実体についてのヒエラルキーに訴えながら、そうした持続する実体には「連続的」なものとして「生起的」なものとの二種があるとし、生命あるいは生物は「連続的実体」であり、生起的な出来事と違い、生成消滅する、と論じる。その点で生物は、物質の塊でもなく、命のない死んだ身体とも異なる。すなわち、アリストテレスの「エネルゲイア」概念にすでに見られていたように、新陳代謝や生殖などを通じて全体としての自身を養い保存するという連続的な生成と消滅のプロセスとしての有機体であること、それが生命体の固有の意義なのであると、そう教授は結論づけた。

すぐに質疑に移った。概して、アリストテレスに依拠するような古代的な視点から生命体を規定することの意義について質問が集中した。とりわけ、現代の生命科学の発展を担っている分子生物学的な視点から見られる生命は、古代ギリシア的なエネルゲイア概念などによって対応的な説明はできないのではないか、といった趣旨の論点が提起された。筆者自身も、教授の生命体の定義だけでは「ウイルス」のような生物とは一般にみなされていないものも含まれてしまうのではないかと疑問に感じていた。こうした問いに対しハイデルベルガー教授は、どんなに先端的な分子生物学でも、結局は生命の定義にまで問いを向けたとき、伝統的な思考様式のなかに戻ってこざるをえない、と論じた。問題はあまりに根源的で、疑問は生じ続ける。しかし、そのことをリアリスティックに再確認できたことは大きな成果であった。講演研究会の後、「フォレスト本郷」にて懇親会を行った。英語、日本語、ドイツ語が入り交じって、にぎやかな論議の場となった。「死生学」プロジェクトが、まさしく展開されていった夜であった。



第19回死生学研究会 報告

(2007年10月24日 16時30分～18時開催)

清水 哲郎 (人文社会系研究科上廣死生学講座教授 臨床死生学・臨床倫理学)

死生学研究会は、若手研究者による研究活動の場であり、21世紀COEの時代に始まり、すでに研究会を18回開催している。今回開催した第19回は、グローバルCOEとしては初回であり、9月中旬ないし10月初めから特任研究員やRAが動き始めた時期でもあったので、グローバルCOEの皮切りのイベントという意味を込めて行われた。

法文1号館312教室を会場とし、事業推進担当者の一人である清水が「臨床死生学の射程」と題して講演をした(参加者は教員6名、若手研究者21名)。演者としては、この人選を、死生学の「構築」を目指した21世紀COEの成果の上に、「展開と組織化」を目指して進められるグローバルCOEが、ことに社会のニーズに積極的に応じる責務を持っていることを確認すべく、まず医療現場への貢献の可能性を考えようという意図によるものと理解した。また、演者は、今年度発足の、グローバルCOEプログラムへの貢献が期待されている上廣死生学講座に着任した新人であり、その理解を披瀝せよということでもあろうと理解した。

さて、実際になされた講演の概要を記す段になったが、困ったことに演者自身には、話すつもりであったこと、話したつもりであることと、実際に話したこととの区別がつかないのである。以下はあくまでも演者の視点からの「話したつもり」の内容である。

講演前半では、死生学という学問領域と、その中における臨床死生学の位置について、社会的ニーズに応えるという観点で見解を述べた。その上で、後半では、死生学-臨床死生学に関わる例を二つ挙げて、その学としての可能性を提示した。

【死生学-臨床死生学について】〈死生学〉には、一つの有望な学際的領域であるという以上の社会的な特別な期待がかけられている。それは、すべての人にとって他人事でない「誰でもいつかは死ぬのだ」という問題をめぐって何らか実践的な知を開拓し、社会に提供する可能性の故にである。この期待に応えるべく、臨床死生学は、医療・介護の現場における死生をめぐる問題に対応する死生学の窓口となり、かつ、臨床現場との対話を通して、研究が実践であり、実践が研究であるような「アクション・リサーチ」を展開する(本ニューズレターNo.18、p11参照)。

【トピック1：

《死》の理解をめぐって】 日本語の「死ぬ」には、死んでいる主体について「これは死んでいる」と述べる用法と、「父は死にました」のよ



うに、在りし日の主体について語る用法とがあることから、身体の死と人(格)の死を区別し(イザナギとイザナミの物語りにはこの区別が反映している)、これを生物学的生命と物語られるものの区別と対応させた。さらに、人の死を不可逆的な交流の断絶(=別れ)と解し、それを「死者の列に加わる」こととして語るところに、死によって人は孤独になるのではないと看做す知恵を認めた。

【トピック2：死に直面した人の《希望》】

重篤な病などにより死に直面した状況で、《希望》は、「治る」可能性への期待や、「死後の生」への望みではなく、現在の生を前向きに生きようとする姿勢に見出されるとした。その姿勢を支えるのは「私は独りではなく、人々のネットワークの中に居るという仕方である」という自己の状況理解であり、そうであればこそ、人々との交流が終末期の生を生きる人を支える要となるのだとした。

研究会後、発足記念パーティーを東大病院「ねむのき」にて行い、事業推進担当者および若手研究者らが多く集って、本プロジェクト・リーダー島蘭進教授の挨拶から始まり、これから5年間に亘る活動への覚悟をしつつ、歓談の一時を過ごした。



Sara Heinämaa博士講演会報告

“Phenomenologies of Sexual Difference:

From Fecundity to Generosity”

榎原 哲也 (人文社会系研究科准教授 哲学)

これまで分析哲学の影響力がきわめて強かった北欧諸国において、10年ほど前から新たな動きが見られるようになった。比較的若い世代に属する人々が「現象学」の名のもとに集まり、盛んに活動を始めたのである。2001年には、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランド5カ国の若き哲学者たちが集まって北欧現象学会を組織し、それ以来、積極的に研究交流をおこなっている。このたびは、その北欧現象学会の現会長、ヘルシンキ大学のサラ・ヘイナマー博士をお招きして、11月7日に講演会をおこなった。以下、その簡単な報告をおこないたい。

『性差の現象学に向けて：フッサール、メルロ＝ポンティ、ボーヴォワール』(Toward a Phenomenology of Sexual Difference: Husserl, Merleau-Ponty, Beauvoir, 2003)の著者、ヘイナマー博士は、これまでフッサール、メルロ＝ポンティ、ボーヴォワールの現象学を基盤にして「性差」をめぐる哲学的諸問題にアプローチしてこられた新進気鋭の現象学者だが、近年はフッサールの倫理思想にも関心を広げておられる。しかし今回の講演会では、「死生学の展開と組織化」というグローバルCOEのテーマに鑑み、「死」と「生」をめぐるハイデガーとレヴィナスのあいだに生じている哲学的問題に関するごく最近のご研究を踏まえて、性差についての現象学的考察を展開していただいた。

「性差の現象学：多産性から寛大さへ」と題する講演の趣旨は、以下の四点にまとめられる。第一に、〈乗り越えることのできぬ死を先取りし、死に向かう存在〉として人間(現存在)を規定するハイデガーの思想は、レヴィナスの視点からすれば、官能というエロスの関係や、父と子という親子関係に見られる〈別の仕方での未来の到来〉

を見落としてしまっていること、けれども第二に、エロスの関係および父と子の親子関係をめぐるレヴィナスの思想も、現代のフェミニストたちの視点からすれば、女性が父性の条件として、また子によって与えられる未来のための手段としてしか考えられておらず、批判されるべきものであること、さらに第三に、すでにレヴィナスと同時代のボーヴォワールが、性差を見落としたレヴィナスを批判しており、ボーヴォワールによれば、エロスの関係における男性と女性の性的欲求には本質的な違いがあること、にもかかわらず第四に、ボーヴォワールにおいては男女のエロスの関係のうち〈意志にもとづいた互いに対する寛大さ〉が実現する可能性も示唆されていると見ないうることである。

たいへん刺激的な内容で、講演後には、ボーヴォワールが描き出す性差とハイデガーが示した現存在一般の実存論的構造とはどちらがより根本的だと考えられるのか、また性的欲望に本質的な差異があるとしたら寛大さはいかにして実現されるのか、といった点をめぐって、予定の時間を越えて活発な質疑応答が続いた。ヘイナマー氏は、ボーヴォワールの「寛大さ」を、男性と女性の本質的に異なる性的な志向性を互いに認め合うこととして理解しているようであったが、後者の質問への回答の際の、「差異そのものをcultivateすること」こそが大切だというコメントが、筆者にはとても印象的であった。

また、前者の質問に対しては、ヘイナマー氏は、妊娠した女性にとっては空間も時間もそれまでとはまったく異なる仕方を経験される、という例を用いながら回答をおこなったが、ここに示されている「性差」という視点は、近年注目されつつある「間文化的」な視点とともに、死生をめぐる諸問題の考察をさらに展開し組織化していこうとするこのグローバルCOEプロジェクトにとって、きわめて重要なものであるように思われた。





ワークショップ「生命科学と死生学の共働」報告

一ノ瀬 正樹（人文社会系研究科教授 哲学）

去る2007年12月1日土曜日、東京大学文学部法文2号館・教員談話室において午前11時より、「死生学」および「応用倫理教育プログラム」主催のワークショップ「生命科学と死生学の共働」が開催された。「死生学」というと、どうしても生命倫理、自己決定権、死生観などの、すぐれて人文的な主題を連想させがちだが、実はもともとから「死生学」という研究領域は広い含意をもっており、医療的意思決定、殺人行為、死刑制度、戦争論、食と環境の倫理、といったテーマを通じて、広く多様な分野へと越境してゆくことを本性としている。とりわけ、それが「Life Studies」をタイトルそのものに含む以上、「Life Science」とのクロスオーバーは必然的と言える。今回私たちは、こうした認識のもと、「生命科学」との共働の出発点となるべく、進化理論、精神医学、放射線科学、遺伝学の分野の第一線の研究者をお招きし、ワークショップを開催するに至ったのである。

ワークショップは午前11時に、G-COE「死生学」リーダーの島蘭進教授の開会あいさつから始まった。全体の司会は下田正弘教授と熊野純彦教授が務めた。第1セッションは、まず、理学系研究科の青木健一教授が「ネアンデルタールとホモ・サピエンスの交替劇」と題して提題した。青木教授は、最新の研究成果や実証的データを駆使しながら、ネアンデルタールがなぜ現人類との競合のなかで消滅していったのかについて論じた。議論は、個体学習と社会学習という対比に基づくいくつかの合理的仮説を数学的手法によって進化理論的見地から比較検証する、という形で進められた。これに対しコメントである筆者一ノ瀬は、そもそもここでいう進化とは何か、遺伝的浮動との違いは何か、個体学習や社会学習の能力の分子生物学的な識別はありうるか、といった基本的論点を提示して、理解の深化を試みた。次に第二セッションは、帝京大学医学部溝口病院精神科の張賢徳准教授が「人はなぜ自殺するのか？」と題して提題した。張准教授は、そもそも自殺にはいくつかのタイプがあり、合理的な決断による自決なども確かに存在するが、多くの自殺はさまざまな社会環境（ストレス、いじめ、借金苦など）によってもたらされる「うつ」などの精神状態が原因となっているということを強調し、そしてそのことを多くの経験的データによって説得的に実証した。よって、精神医療が自殺の防止に果たしうるポテンシャルが確認されなければならない、と結ばれた。これに対し竹内整一教授が倫理的な観点からこの問題についてコ

メントを加え、自殺するということが人と人の関係に及ぼす影響を大きな考慮要素とすべきだという方向の論を提示した。

さらに第三セッションは、医学系研究科の中川恵一准教授が「日本人の死生観とがん治療」というタイトルのもと、死生学との共働にすでに深く立ち入った提題を行った。中川准教授は、日本は世界に冠たる長寿国であると同時に世界一のがん大国でもあり、日本人の二人に一人はがんになること、にもかかわらず日本人はがんの実態、その治療や看護のさまざま、そして緩和医療などについて知識がきわめて少ない、それゆえこうした側面の啓蒙活動がぜひとも必要であると熱を込めて論じた。これに対して、人文社会系研究科の清水哲郎教授が、治療と看護（キュアとケア）との区別に対してコメントし、そうした区別がそもそもゆらいでいるという認識から論を立てるべきだと提言した。そして最後に第四セッションは、総合文化研究科の石浦章一教授が「心の動きを分子レベルで語る」と題して提題を行った。石浦教授は、大変に興味深い事例を豊富に駆使しながら、人間の病気や性格や傾向性などが脳の働きや遺伝子などについての分子生物学的あるいは遺伝学的な分析によって一定程度解明されてきており、それゆえそうした人間のあり方の改善も原理的に可能になりつつある、そして今後さらにそれは進展することが期待される、と論じた。これに対して本「死生学」プロジェクトのリーダーである人文社会系研究科の島蘭進教授がコメントを加え、自然科学的な技術によって安楽になったり有能になったりすることは偽りの自己なのではないか、という根本的な疑念を提起しつつ、生命科学と人文学の新たな出会いの提言に至った。そして最後に、応用倫理教育プログラム委員長の竹内整一教授が閉会のあいさつをして締めくくった。その後、山上会館において懇親会を開催し、人文社会系研究科長の立花政夫教授からあいさつをいただいた。その懇親会の場においてもさらに議論は盛り上がり、そうして学際的な一日は有意義に過ぎていったのである。

以上のような生命科学と死生学の共働の試みがどこまで成功したかは、おそらく今後の共働の展開・継続にこそ掛かっているだろう。しかし、その第一歩を踏み出した事実はきわめて大きい。今後さらに、栄養学、薬学、動物行動学、森林生態学などの分野とも連携を深め、共働を積み重ねていきたい。

シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性

東西比較の試み」を終えて

秋山 聡 (人文社会系研究科准教授 美術史学)

去る12月16日午後1時から本学本郷キャンパス法文2号館の一番大教室においてG-COE主催の公開・国際シンポジウム『聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み』が行なわれました。会場には当初の予想を超えて130-40人ほどの方がみえ、念のため150部ほど準備していた配布資料が底を尽いたのは嬉しい誤算でした。

シンポジウムは二部構成で、第一部は四人の仏教およびキリスト教美術研究者による講演に当てられました。島蘭進拠点リーダーにより本G-COEについての紹介を兼ねた開会挨拶がなされた後、肥田路美氏（早稲田大学）は、中国における舍利信仰の歴史的展開を紹介されました。その際言及された王権との関わり、呈示・展示の諸相、辺土意識等の論題は、いずれもキリスト教中世の研究者にとって比較対照の上で極めて魅力的なテーマであり、海外から参加されたお二人が盛んにメモを取っておられたのが印象的でした。次いで、エリック・トゥーノ氏（ラトガース大学）は、ローマのサンクト・サンクトールム礼拝堂に秘蔵された聖十字架の断片を納めた十字架型聖遺物容器と、やはり同地の聖ブラセーデ聖堂のモザイク壁画を取り上げ、キリスト教中世における聖遺物と造形イメージとの多様な互惠関係について論じられました。またスコット・B・モントゴメリー氏（デンヴァー大学）は、中世後期に発展した肖像型聖遺物容器の興味深い事例を取り上げ、その儀式での利用などを自らの調査譚を交えながら紹介され、聖人＝聖遺物が、聖遺物容器とも同一視された可能性について論じられました。最後に、根立研介氏（京都大学）は、日本における肖像彫刻と遺骨崇拜との密接な関わりについて、中国での先例に言及しつつ、論じられました。西洋研究者



にとってはその内容は、聖遺物崇敬の枠組みをさらに超えて、人体の代替物としての造形イメージといった観点からの比較研究（たとえばロウ製肖像彫刻など）の可能性が示されたようにも思われました。

第二部では、冒頭に秋山がベルティンクを引用しつつ、聖遺物とイメージの相関性についての東西比較の可能性をめぐって簡単にコメントをした後、第一部に基づいてのディスカッションが行なわれました。詳細は次年度に刊行される予定の報告書に譲りますが、予定した時間を越えても、議論の話題は尽きず、聖遺物というテーマや東西比較という試みに対する興味・関心の高まりを実感した次第です。しかし一方で、出席者の大半が西洋研究者であったことも事実であり、閉会挨拶において小佐野重利人文社会系研究科副研究科長からの指摘にあったように、今後自国研究者が一層国際的な比較研究に積極的に参画することが望まれます。

なお参加者の中には遠隔地からお出でくださった方々も少なからずおられました。また会場で配布したアンケート用紙にはかなりの方が記入してくださいましたが、中には今後への貴重な示唆や提案も含まれていました。こうしたご指摘を参考にしながら、さらに議論を深めることが可能なシンポジウムを企画してゆこうと思っております。末尾ながら、ご講演くださった先生方はもとより、ご参加くださったみなさま、また様々な準備、運営に関わった研究員スタッフや学生みなさんに篤く感謝申し上げます。

なお今回のシンポジウムは「死生と造形文化Ⅰ」として行なわれたものですが、「死生と造形文化Ⅱ」は、「礼拝像と奇跡」をテーマとして本年5月31日（土）に開催されることになっています。詳細は改めてお伝えすることになるでしょう。





平成19年度アカデミック・ライティング

(Academic Writing) 集中講座のお知らせ

東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」では、若手研究者の英語による論文執筆能力の向上を図り、研究成果の海外発信を促すために、ウェスタンミシガン大学のCELSIS (The Career English Language Center for International Students) から講師を招き、アカデミック・ライティングの短期集中講座を開講します。希望者を以下の要領で応募いたしました(すでに締め切っています)。この講座は、原則として、来年度もほぼ同時期に継続して開催する見込みです。

1. 講師 ウェスタンミシガン大学Thomas C. Marks講師

2. 期間 2008年3月3日(月)～ 3月8日(土)

3. 場所 本郷キャンパス法文1号館111番教室

4. 応募資格

応募時点および支援を受ける期間中において、以下の条件をすべて満たしている者。

(1) 次の三つの要件のいずれかに該当する者。

(i)東京大学大学院人文社会系研究科の博士課程在学者、または同研究科の博士課程単位取得退学者または博士課程修了者。

(ii)21世紀COE「死生学の構築」やグローバルCOE「死生学の展開と組織化」の研究員・RA就任歴のある人。

(iii)東京大学のいずれかの大学院博士課程の在籍者・退学者・修了者で、今後「死生学の展開と組織化」に関与することを希望している人。

(2) グローバルCOE「死生学の展開と組織化」に関連する研究を遂行し、かつ事業運営に関わることのできる者。具体的には内外の専門誌に死生学に関連する論文を発表する意志や、COE主催のシンポジウム、研究会等に積極的に関わる意志のある者。

(3) 原則として、上記期間の全日欠かさずに受講できる者。

(4) 死生学に関連するテーマの論文を英文で作成する意志を持ち、事前指導を受けるための英文ドラフトを2008年2月8日(金)までに提出できる者。

5. 募集人数

10名程度を予定。

6. 受講料

無料

7. 応募方法

「G-COEアカデミック・ライティング受講願書」および「履歴書」(形式自由)を記入の上、本COE研究室に提出。

12月19日(水)必着。なお、「G-COEアカデミック・ライティング受講願書」は本COE研究室にて配布する。

8. 選考基準

死生学に関わる研究としての有意義性と論文が完成する期待度に照らして選考する。

9. 選考結果の通知

結果は1月上旬に本人へ通知する。

10. 応募に関する問い合わせ先

グローバルCOEプログラム

「死生学の展開と組織化」研究室(法文2号館3階) 03-5841-3736



研究会のご案内

日本人の死生観の歴史研究会(仮称)

「日本人の死生観の歴史研究会(仮称)」は、昨年8月、順天堂大学医学部医史学講座・酒井シヅ教授のもとへ、2人で半ば押しかけのように伺ったことから始まりました。

がん患者さんの死生観に関するアンケートを、医学部附属病院放射線科で行うにあたって、古今東西の死生観・疾病を知り、比較を行うことにより、現在の日本人の死生観の特徴および問題点がみえてくるものと考え、本邦唯一の医史学研究講座である順天堂大学医史学講座のご協力を賜ることになりました。メンバーは実に多様で、医史学、精神科学、解剖学、衛生学、臨床心理学、緩和ケア学などの分野で死生観に興味をお持ちの方が、月1回集まり、それぞれの専門分野での死生学に関する議論を行っています。まだ端緒についたばかりで試行錯誤の状態ですが、各々の専門分野に関するとても興味深い議論がなされています。皆様のご聴講および今後の会合へのご参加をお待ちしております。

【担当：加藤大基、中川恵一（医学部附属病院）】

応用倫理・哲学研究会

応用倫理とは、古典的な倫理や哲学では予期できなかった現代固有の倫理的問題について考察し、規範的な提言を試みる分野であり、生命・医療倫理、遺伝子倫理、神経倫理、環境倫理、情報倫理などがその根幹をなす。人文社会系研究科に深く関わる分野であり、実際「応用倫理教育プログラム」がカリキュラムの一つとして実施されている。筆者の属する哲学研究室でも「応用倫理勉強会」として十回以上の研究会を積み重ねてきた。この勉強会は21世紀COE「死生学の構築」の活動の一部として行われてきたということもあり、今回グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の発足に当たって、「応用倫理・哲学研究会」としてリニューアルして開催することになった。年二回、原則として夏と冬に開催する。この会としての第二回が2008年2月29日（金）に哲学研究室にて開催される。矢島壮平（倫理）、島村修平（哲学）、手塚博（哲学）の三名が発表予定である。ふるってのご参集を待ちたい。

【担当：一ノ瀬正樹（人文社会系研究科）】

臨床死生学・倫理学研究会

本会は、主に医療・介護の現場で生と死を考えざるを得ない状況に臨みつつ行う知的な営みについて、参加者が自発的に発表及び議論することを目的としている。しかし、発表のテーマは必ずしもこれに限定されない。参加は自由で、ひと月に1～2回開催する。これまでの発表は以下の通り——「行為論におけるケア概念」（早川正祐）、「価値の規範性——構成主義に基づく一解釈」（福岡聡）、「自由によって形成される信頼関係」（圓増文）、「臓器移植を受けるということはどういうことか」（宮崎裕子）、「コンパニオンアニマルの安楽死について——その現状と問題点」（梶原葉月）、「死生学リカレント教育カリキュラムについて」（福岡聡）、「臨床死生学ベーシックの構想」（清水哲郎）、「泣ける」死の物語の問題性——マンガ『イキガミ』を題材に」（山崎浩司）、「死の臨床における世代継承性の問題——在宅がん患者の「病いの経験」への接近」（田代志門）。

【担当：清水哲郎・山崎浩司（人文社会系研究科）】

現代フランス哲学と生命論研究会

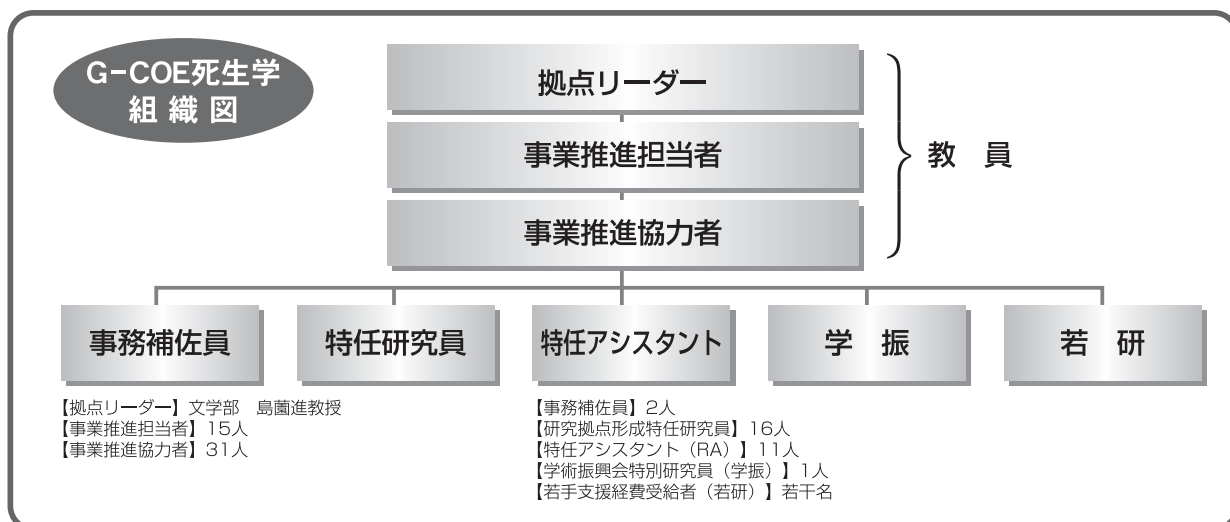
死生学研究が、Thanatologyと異なるのは、それが生・生命に対する考察にもその軸足を置くからに他ならない。生・生命に関する考察は、生命科学や臨床現場における活動とも連動してなされなければならないが、同時に哲学における思索の蓄積も重要な役割を果たすはずである。その中でも、主立った名前を挙げるなら、ビシャラを前史としてベルクソンからカンギレムを経てドゥルーズに至るフランス哲学・思想には、生・生命に関する独自の概念を作り上げてきた一連の系譜が存在する。この系譜の思索を主題的に検討することによって、死生学研究に原理的な場面から幾ばくかの寄与を行うということを目的として、研究推進協力者である金森修教授（教育学研究科）と共に、2008年度から研究会を行うことにしている。関連企画としてモンテペロ教授を囲むワークショップを既に行った（本号所収の報告を参照されたい）が、この方面に関して研究を進めている若手研究者の報告を中心とした研究会になる予定である。

【担当：鈴木 泉（人文社会系研究科）】



事業推進担当者（計15名）

島 園	進（しまその・すすむ）	宗教学宗教史学
秋 山	聰（あきやま・あきら）	美術史学
安 藤	宏（あんどう・ひろし）	日本文学
池 澤	優（いけざわ・まさる）	宗教学宗教史学
一ノ瀬	正 樹（いちのせ・まさき）	哲学
大 稔	哲 也（おおとし・てつや）	東洋史学
熊 野	純 彦（くまの・すみひこ）	倫理学
佐 藤	健 二（さとう・けんじ）	社会学
清 水	哲 郎（しみず・てつろう）	哲学・臨床倫理学
下 田	正 弘（しもだ・まさひろ）	インド哲学仏教学
鈴 木	泉（すすき・いずみ）	哲学
高 橋	都（たかはし・みやこ）	公衆衛生学・精神腫瘍学・内科学
竹 内	整 一（たけうち・せいいち）	倫理学
中 川	恵 一（なかがわ・けいいち）	医学部附属病院 緩和ケア診療部
山 崎	浩 司（やまざき・ひろし）	医療社会学・質的研究



目 次

— CONTENTS —

● 巻頭エッセイ ●

死生学と人文学

下田 正弘 2

死と二十一世紀アメリカ小説

柴田 元幸 3

「死生学」と私

栗原 剛 4

● イベント報告 ●

余英時教授講演会報告

小島 毅 5

ワークショップ「生の哲学の彼方 ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』再読」報告

鈴木 泉 6

ワークショップ「現代フランス哲学と生命論」報告

鈴木 泉 7

Michael Heidelberger教授講演研究会報告

一ノ瀬正樹 8

第19回死生学研究会報告

清水 哲郎 9

Sara Heinämaa博士講演会報告 “Phenomenologies of Sexual Difference:
From Fecundity to Generosity”

榊原 哲也 10

ワークショップ「生命科学と死生学の共働」報告

一ノ瀬正樹 11

シンポジウム『聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み』を終えて

秋山 聰 12

● 企画案内 ●

アカデミック・ライティング (Academic Writing) 集中講座のお知らせ

13

研究会のご案内

14

● 「死生学の展開と組織化」組織図 ●



死生学 DALS ニュースレター No.19

平成20年2月15日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島菌 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>